

後期中観思想—所取能取を離れた自己認識 (svasamvedana)

批判と知の一多の吟味—の形成とシャーキャブッデ (上)

森 山 清 徹

〔抄 録〕

シャーキャブッディの所取能取の形象を虚偽、二取を離れた青などの形象を真とする無二知としての自己認識論をジュニャーナガルバ、シャーンタラクシタ、カマラシーラ、ハリバドラの後期中観派は論難している。このことの検証を目的とする。シャーキャブッディはPVIII213を注釈する『量評釈論註』(PVTŚ)において所取能取は遍計故、一、多の点で吟味に耐え得ないから真実ではないと導く。しかしながら自己認識のみとしての覚知の自性は遍計ではなく自己の因から生起し依他起性にして不空なる真実在であると論じる。他方、中観派は『般若経』などの聖教を根拠に一切法の空を提唱する。この限り相対否定として解釈する瑜伽行派の空と絶対否定と見る中観派の空の解釈との伝統的な論議に立脚するが、遍計なる所取能取を欠く無二なる自己認識論を無知覚 (anupalabdhi) 論と同一視し二取の無が確定し得るか否かを相対否定、単なる無知覚の問題として吟味することを考慮すれば、それはシャーキャブッディの自己認識論への論難であると見られる。これに加え特にシャーンタラクシタ以下は離一多性の観点から同じくシャーキャブッディによる単一な知と多様な形象の対応関係及び知の同時多論を退け一切法の無自性論証を形成している。

キーワード シャーキャブッディ、ジュニャーナガルバ、カマラシーラ、所取能取、青などの形象

ジュニャーナガルバ (c.700-760) の『二諦分別論』SDK6,24、それに関するシャーンタラクシタの注釈 (SDP)、カマラシーラの『中観光明論』(MaI)に見られる遍計なる所取能取を離れた覚知の自性を真とする自己認識論への論難、またカマラシーラの『七百頌般若釈』(SPT)、ハリバドラの『八千頌般若経釈大註』(AAA)に見出される離一多性という点からの単一な知と多なる形象及び同類の多なる知の同時生起論への論難を分析し、それらはシャーキャブッディ (c.660-720) の自己認識論への論難であることを特定し、またこのことを通じ後期中観思想は形成されていることを究明する。

I. ジュニャーナガルバの SDK6 (聖教を巡る所取能取を欠く無二知としての自己認識論の吟味), SDK24 (必然性を観点とする所取能取の顕現の問題), カマラシーラの Māi (それら両論の吟味)

I. I. SDK6: ジュニャーナガルバの自己認識批判(1)

〈経典に説かれる見ないというのは絶対否定である〉

ジュニャーナガルバによる所取能取を欠く無二知の自己認識論に関する不合理の指摘は以下の点に要約し得る。→以下はジュニャーナガルバの答論であり〈〉内はシャーンタラクシタの注釈である。[] 内は筆者の補ったものである。

①何も見ないことが真理を見ることである (SDV4b1, 'ga' yañ mthoñ ba med pa ni de kho na mthoñ ba) という聖教(A)を巡り、〈所取能取を離れた縁起したものである自己認識は存在するものである故〉遍計所執性なる所取能取を見ないこと (SDK6ab) を自己認識と解釈する瑜伽行派と一切法を見ないことと解釈するジュニャーナガルバ〈シャーンタラクシタは一切法を見ないことを絶対否定 (med par dgag pa, prasajyapraṭiṣedha) とする〉との論議が展開している。対論者は遍計所執性なる所取能取の形象を欠く依他起性なる無二知 (advaya-jñāna) としての自己認識 (svasaṃvedana) を主張し二取を見ないことが真理を見ることであると上の聖教(A)を解釈する。それに対しジュニャーナガルバは次の論難を展開する。それは相対否定 (paryudāsa) としての認識の条件が揃えば認識されるものの無知覚 (anupalabdhi) の理論を意味する。しかし二取は遍計故、元来認識されないから認識の条件が揃えば認識されるものの無知覚ではない。したがって相対否定は成立せず二取の無なる知は確定されない (SDK6c)、他方、聖教(A)を〈二取の単なる無知覚に過ぎない〉と解釈するなら二取の無という結果を確定し得ない故、無効力 (SDK6d) で不合理である⁽¹⁾。これはダルマキールティの超感覚的なもの (atīndriya) の無知覚論を逆用し自己認識批判に適用するものである。(→ I. III. ①)

②〈二取を欠いた知が自ら知られる→知自体の顕現を欠いている、青とその知の如く二取の形象と知は区別 (bheda) あるものとなる〉〈別の知により所取能取は知られる→無限遡及となる〉

③ [知は] 認識を自性とする→過大適用の過失となる 〈青の知と黄色の知の識別が存在しない〉 近接した因がない

④知の自性は自己の因から生起する [シャーキャブッディの見解の引用と見られる⁽²⁾] →過大適用の過失となるし証明するプラマーナがない→無形象知識論と同じことになり、汝らは有形象知識論をプラマーナとして提示し得ない

I. II. SDK24: ジュニャーナガルバの自己認識批判(2)

①遍計されたもの〈所取能取〉は無であるから依存するもの (因) がない (SDK24ab) 〈遍計されたものは専ら無である、世俗としても無〉→直接知覚と矛盾する、二取も直接知覚さ

れ⁽³⁾〈あらゆる人々の常識のプラマーナによりよく知られている〉

②無明により二取が知られる→知覚経験と矛盾する(⇒I.Ⅲ.⑤2')→〈知は内に存在し色は外に顕現すると知覚経験される〉自己認識は汝の悪しき執着(abhiniveśa)である。〈顕現するがままに外界の色などは存在する〉(⇒I.Ⅲ.⑤1'), 3')

③〈自己認識は吟味に耐え得ないから世俗であり勝義不生である〉

④世間の人々にとり二取と無二〈離性、viviktasvabhāva〉なる依地他起性(知自体)との必然関係の吟味、その二者には同一性も、無明を因とすることによる因果性も成立しない。〈無明による惑乱から二取が顕現するから〉もし必然関係があるなら二取は依他起性となり(SDK24cd)不合理である(⇒I.Ⅲ.⑥)

⑤知が二を顕現する→その知は二を欠くものではない

⑥無明による別の知により二取を知る→別の知も二を欠いている、必然関係がない→二は顕現し得ない[以上から無二知なる自己認識は不合理である]

I.Ⅲ. カマラシーラのMālにおける自己認識批判(→はカマラシーラの答論)

一切法の不生を説く聖教を巡り遍計所執性である所取能取は無自性、不生であるが自己認識はそうではない。二取は虚偽である故、それによって確定されるものも虚偽となるというシャーキャブッディの自己認識論に同定されるものを前主張として取り上げ、後主張において、カマラシーラは論難している。その主要点は先の SDK6,24 のものと一致している。その論議を以下に示す。

①自己認識における所取能取の二取の無を絶対否定として解釈するなら、勝義としての離性のみとしても非存在(abhāva)を自性とするとしてもすでに証明されたものの証明(siddhasādhana)に過ぎない(⇒I.Ⅰ.①)

[以下二取の無を相対否定として解釈する場合の不合理を指摘]

②シャーキャブッディによる一般的なダルミンにより能遍と対立するものの認識(vyāpakaviruddhopalabdhi)因に基づく二取を欠く覚知の自性の推論は因が不確定(anaikāntikatā)。

③二を欠いている知が成立するなら必然的に実在を自性とするもの(真実なる実在、二取の無)が成立する[無知覚の理論]→反所証拒斥検証が成立しない(⇒SDK6)

④外界の対象は自ら照明(顕現)し覚知の自性であるから覚知の自性は二取を有する故、二を欠く一般的な自性のダルミンは存在しない。それ故に立証因は所依不成(āśrayāsiddha)である。②、③をも合わせて無二知なる自己認識を立論する推論は成立しない。

⑤シャーキャブッディは次の三点から自己認識論を主張する。

1) 外界の対象と対応する自覚性のない能取とは異なる 2) 二取は主体と客体の関係に依存して遍計されたもの故、虚偽である故、知は無二である 3) 自ら顕現する覚知の自性(bodharūpatā)、以上の三点をカマラシーラは順に論難する→1')外界の対象と無二知とは対立しない→2')知覚

経験と矛盾する (⇒ I . II . ②)、二取は凡夫の概念知を離れた心に明瞭に顕現する→3) 汝は二を欠いた無顕現な覚知の自性 (自己認識) を離性 (vivikṭasvabhāva) であると執着している (⇒ I . II . ②③)

⑥虚偽なる諸の形象と真実なる覚知の自性には同一性、因果性の必然関係がない (⇒ I . II . ④) →同一性があるなら両者とも虚偽となる→覚知の自性 (自己認識) を真実とする執着を断つべし (⇒ I . II . ④)

II. カマラシーラとハリバドラ

II . I . カマラシーラの『七百頌般若釈』(SPT)、II . II . ハリバドラの『八千頌般若釈大註』(AAA) における自己認識論批判

SPT においては、先に示した SDK6, Māl の場合と同じく不生とは遍計されたものを意図していると解釈する瑜伽行派と一切法の不生を主張する中観派との論争を呈している。またシャーキャブッディの PVTŚ からのまとまった引用も見出されると共に、シャーンタラクシタの MAV と重なる論議も展開される。その中心として離一多性の点から、単一な知と多なる形象及び同類の知の同時多論が吟味される。この点を AAA により要約すれば、

諸の形象は単一な知と別ではないから単一となるなら、全体性 (avayavin) の場合の如く⁽⁴⁾、一なる形象が動けば、残りの諸形象も同様、動くことになり不合理である。また、諸形象には種々性 (nānātva) がある故、それと別ではない知にも種々性があることになり知の無二であることが崩れる (⇐MAK46,47)。その知に種々性があるとする場合、異類の知 (例えば眼識と耳識) の同時生起はダルマキールティによっても認められている⁽⁵⁾が、同類の多なる知 (例えば二なる眼識、二なる耳識) が生起するのなら⁽⁶⁾、空間的観点からの問題が指摘される。すなわち他の諸原子により包囲された中央に位置する原子が有する矛盾⁽⁷⁾つまり (原子の無部分性により) 同一地点にあることになるか、(原子が部分を有するなら) 単一性が崩れるという不合理が生ずる (⇐MAK49)。同時に多なる知が生起するなら、時間的観点からの問題が懸念され諸の分別も同時に生起することになりそれぞれの分別は次第して生起するというダルマキールティの定説 (PVIII502ab) に反することになる (⇐MAV ad MAK49)、また多数の分別知が同時に生起するなら分別を離れているという直接知覚と対立する。

III. 上の I . 及び II . ともシャーキャブッディの見解が批判されているとすることの根拠

I . I . ①と I . III . において何も見ないことが真理を見ることであるという聖教を遍計なる二取を欠く知 (無二知) を認識することが真理すなわち二の無を知ることと解釈し(1)自己認識論、(2)相対否定としての無知覚 (anupalabdhi) の理論として、さらには(3)三性説に相応させて言及するもの及び I . I . ④知は自己の因によるとするものは以下の二取の無を相対否定として解釈し無二知としての自己認識論を立論するシャーキャブッディの言明である。

(1)自己認識のみである覚知の自性も所取と別個な能取という言葉によって言われるものではない。覚知の自性は相互に依存し合って構築された所取能取の関係にない。自己の因自体からそれ(覚知の自性)はそういうものとして[自ら]生起するに他ならないからである。その覚知の自性自体が無二なる自己認識のみとして定まっている(PVTŚ P252a1-2)⁽⁸⁾。

(2)二を欠いていることが真実であるから二を欠いている知識の自体を知覚すること(自己認識)が真実(二の無)を見ること[円成実性]である。そうであれば二を欠いている知識自体が生起する(見られる)時に、真実自体が見られるであろう(PVTŚ P256a7-8)

(3)『般若経』などに説かれる一多の自性の拒斥、不生の意味は遍計所執性だけが意図されているが、依他起性なる[所取能取を欠く]無二なるもの(自己認識)が[意図されている]ではない。[主体と客体は相互に依存し合って遍計、仮説されたものであるから]二として顕現するもの(所取能取)も虚偽であるから、それ(二)によって確定される自性をもつもの(二を有した知)も虚偽に他ならない(cf PVTŚ P252b7-253a1)。

I . II . ①における遍計所執性は依存するものがなく無であるとするもの、また I . II . ②, ④において二取は無明、迷乱によるとするものは次のシャーキャブッディの見解である。

所取能取の形象が迷乱である場合、そういった生起などは依存するもの(dmigs pa'i rten can)をもたないという意味である。これは遍計されたものは無であるというのである(PVTŚ P253a4-5)。

外界の対象が存在しないとしても、その知こそが形象を生起する。そうであれば[知は]明らかに二自性(所取能取)を有するものである。しかしながら二なる自性を有したその知も真実ではなく迷乱(bhrānti)によって確定される。執着のままに言語行為(vyavahāra)において実在であると確定されるからである。さもなければ、どうして単一な知(budhi)に二なる自性が真実となろうか(PVTŚ P250b8-251a1)。

この点は必然関係(pratibandha)の問題として二取が迷乱や無明によるなら二取は依他起性となると中観派により論難される。

I . I . ②は自己認識が知自体としての顕現を欠くなら青とその知の如く形象と知は区別されることになる論難するものであるから、これは青とその知を無区別、同一性と解釈するシャーキャブッディの見解⁽⁹⁾を想定していると考えられる。

I . I . ②〈別の知により二取が知られる〉とするものは別の知によって確定された特徴付けを自性とするものが[所取能取の形象という]特相である。そういったその(所取能取の)自性として空であるからという意味である。それは自己認識の自性として[空なの]ではない。[自己認識は]別の知によって特徴付けられ得ないからである(PVTŚ P253a8-b2)。

I . III . Māl に関しては、内容は I . I . SDK6, I . II . SDK24 のものと事実上重なることに加えシャーキャブッディの PVTŚ における論述を逐語的に取り上げ一致するものがまつま

て見出される故、SDK6,24 の場合よりも一層シャーキャブッディの所取能取の形象を欠く自己認識論を論難していることが確証される。それはシャーキャブッディの次の三点に要約される自己認識論に同定される。

1) 外界の対象に対応する能取と自己認識は対立する特徴を有する。2) 二取は主体と客体として依存関係により仮説されたもの故、虚偽である。3) 覚知の自性は自己の因から生起し虚偽ではない (cf PVTŚ P251b4-252a2)。

II. に関して、本論文の(下) [佛教大学仏教学会紀要16号掲載予定] において研究と訳注を示すが、そこでの知の同時多論はカマラシーラの SPT に引用される通り、シャーキャブッディの見解を取り上げるものである。そこでは知の同時多が異類の知に関してであると限定されているわけではない。そこで同類の知に関してであれば、ダルマキールティの PVIII501cd の規定に反するとシャーンタラクシタ以下により論難されることになる。そのシャーキャブッディの見解とは次のものである、

楽などのように青などもそれ自体で覚知を自性とするものである。もし同時に多なる知が得られるというなら、[そう] 認めているから、この (知と諸形象との一多の対立という) 過失はありはしない (PVTŚ P255b4-5)。

結 論

後期中観派の諸論師のテキスト、ジュニャーナガルバの SDK6, 24、シャーンタラクシタの SDP、カマラシーラの MāI には遍計なる所取能取の形象を離れた自己認識論への論難が表されている。またカマラシーラの SPT、ハリバドラの AAA から知の単一性、知の同時多論を吟味する部分を分析した結果、そこでの対論者である瑜伽行派の論師とは依他起性なる自己認識が二取 (遍計所執性) を離れていることを真理 (円成実性) と見、他方、二取を離れた青などの形象は同時に多として自己認識されると提唱するシャーキャブッディである。

I. I. SDK6 からは二取なる遍計所執性に関して何も見ないことが真理を見ることという瑜伽行派の見解が相対否定としての自己認識の理論として吟味される。二取は遍計されたものである故、知に顕現せず認識されないから、自己認識は認識され得るものの無知覚すなわち相対否定として成立しない。他方、二取の無を単なる無知覚として自己認識を想定するなら、二取の無を確定し得ないから不合理である。したがって真理を見ることも成立せずシャーキャブッディの自己認識論は不成立となる。

I. II. SDK24 からは常識のプラマーナである凡夫の直接知覚に二取が顕現することの必然関係 (同一性、因果性) を、シャーキャブッディが無明や迷乱によるとするなら二取は依他起性となり遍計所執性と規定することに反する。虚偽なる二取と依他起性なる知には必然関係は成立しない。

I. III. は Mal においてシャーキャブッディの無二知なる自己認識論を前主張で取り上げ後主張で論難するものである。すなわち所取能取の形象を欠く無二知の立論は二取の無を絶対否定と解釈するなら、勝義として二の離性のみとしても、あるいは非存在 (abhāva) を自性とする勝義の点からであっても証明されたものの証明にすぎない。二取の無を相対否定と解釈する場合、以下の不合理が指摘される。シャーキャブッディによる能遍と対立するものの認識 (vyāpakaviruddhopalabdhi) 因による二取を離れた自己認識 (覚知の自性) の推論は因は不確定 (anaikāntikatā) であり所依不成である。また【無二であれば必ず真実なる実在がある】との主張は反所証拒斥検証が成立せず不可。さらに1')外界の対象に対応する自覚性のない能取と自己認識を対立関係と見ることに関しては、外界の対象を認識するとしても無二知は成立し得る (経量部説) 故、外界の対象と無二知とは対立しない。2')二取を主客の依存関係による構築と見ることに関しては、知覚経験と矛盾し、凡夫の直接知覚に二取が明瞭に顕現する故、不可とする。3')覚知の自性を離性とすることに関しては執着であると退ける。また二取を虚偽、遍計とする主張にはそれと真なる自己認識との必然関係 (同一性、因果性) が成立しない。以上を『金剛般若経』を聖教として決着させる。これらは I. I., I. II. と重なる故、I. I., I. II. もシャーキャブッディ批判であると知られる。

II. I. II. II. における自己認識批判は以下の点からなされる。すなわち知の単一性は多様な形象を真として有する限り両者の一多の不整合を克服し得ない。知の同時多論は他の諸原子により包囲されている中央に位置する原子の場合と同じ誤謬すなわち原子は無部分故、多を形成しえないか、あるいは多であり得るなら原子の単一性が崩れるという難点を伴う故、また同類の知の同時多生起を認めないダルマキールティの規定に反する故、成立しない。それ故、シャーキャブッディの如く離一多性を遍計所執性 (外界の対象、所取能取の形象) に限定することはできず二取を離れ多なる形象を真として有する自己認識をも含む一切法に関しても離一多性は成立することとなる。この後期中観派の離一多性を根拠とする無自性論はシャーキャブッディの PV III 200-224 の注釈中に展開される理論 (全体性及び原子論批判、自己認識論) の活用と批判により形成された。

資料—後期中観派諸論師のテキスト和訳研究

I. I. ジュニャーナガルバの自己認識批判(1)—『二諦分別論』SDV(4a7-b7), SDP(18b4-20b4) ad SDK6⁽¹⁰⁾

[1. 聖教の解釈、一切法の絶対否定]

[勝義が] 顕現するがままの存在として確定されることは妥当しない。知識としてのあらゆる存在に、いかようにしても [勝義が] 顕現することはない。(SDK 5)

勝義は、顕現するままのものとして確定されることはない。一切智者 (sarvajña) の知識〈及び一切智者にあらざる者 (SDP 18b6)〉にも、[勝義は] 顕現しないからである。

①それ故に、経典に「何も見ないことが真実を見ることである (SDV4b1, 'ga' yañ mthoñ ba med pa ni de kho na mthoñ ba)」⁽¹¹⁾と説かれている。〈[一切法を] 見ないというのは絶対否定 (med par dgag pa, prasajyapratīṣedha) である (無二知を見るわけではない)。(SDP 18b7)〉

[反論]

[2. 瑜伽行派の見解：二取を見ないことが真理を見ることであると二取の無を相対否定と解釈する]

〈所取能取を離れた縁起したもの (pratīyasamutpanna) であるそれぞれ自ら認識する (so so rañ gis rig pa, pratyātmādhigama) 知 (自己認識) は存在するものに他ならない。[経典に] 何も ('ga' yañ) 見ないとそう説かれているのは、遍計所執性 [なる二取] を意図して説かれていると、[瑜伽行派は] 主張する場合に、(SDP 18b7-19a1)〉

遍計所執性に関して何も ('ga' yañ) 見ない。(SDK 6ab)

[依他起性において] 遍計所執性に関して何も見ないことが真理 (円成実性) を見ること (de kho na mthoñ ba) であるというこのことが [経典に] 説かれていると [瑜伽行派は] 主張する⁽¹²⁾。

それは、そう 〈遍計所執性に関して (SDP19a2)〉である。

そうでなければ 〈あらゆる自性 (ño bo ñid ma lus pa) に関してであれば (SDP19a2)〉 [経典に] 何も ('ga' yañ) ということが、何故、説かれるのか。〈[すべてについて] 普遍的にいわれるのなら (SDP19a3)〉 [あらゆる] 自性 (ño bo ñid) を見ないということこそを説くことが道理に適っていよう。〈そうであれば、申し分のないものとなろうが、そうでなければ (遍計なる二が意図されているなら、あらゆる自性に関してというのは) 論議にそぐわないこととなろう。(SDP19a3)〉

[答論：3. 自己認識批判]

それは、妥当しない。

自己認識 (rañ rig) は [相対否定 (paryudāsa) を意味する故] 不合理 (SDV4b3) だから

である。(SDK 6c)

知が二を欠いている自性のもの(依他起性)を[自己]認識し、それ(遍計なる二)は無である<無二(SDP19a3)>と知るのである[すなわち汝によれば自己認識は相対否定(二取の無を見ることにより無二なる知が成立することである)が、そうでなければ[認識の条件が整っても遍計である二取は元来認識されない故、相対否定が成立しない]つまり[二を]欠いている自性のもの(無二知)を[自己]認識しないなら、無二と知することは(SDP19a4)>不合理だからである。<このことによって丁度、壺などを欠いている自性をもった地面[無二、依他]を知らずして、そこに壺がないと知られないのと同様であるというのである⁽¹³⁾。(SDP 19a4)>

[2.知は自らによって自らを知るという見解の批判]

②<[反論]二(所取能取の形象)を欠いた自性のもの(知)を自ら知ること(ātmañña)がある。(SDP 19a4-5)>

[答論][無顕現故、自己認識は不合理]

<それ故に、(SDP 19a5)>

(宗)知(A)は自らによって自らを知るものではない。

(因)[知(A)は知]自体としての顕現(rañ snañ ba)を欠いているが故に。

(喩)別の知(B)[が(A)を知る]如し。

<これは、卓越した推論を述べる者の表明(sbyor ba gtso bo smos pa'i tshig)⁽¹⁴⁾であるが、これ自体は論証する推論ではない。そうなら、その場合、別の知(B)の如しという喩例は[異品であって]所証(sādhyā)(自らによって自ら知るものではない)を欠くであろう。[すなわち]他方の別の知(B)は自ら(A)を知るに他ならない。この場合、[論証する]推論は以下のものである。

[知自体としての]顕現を欠いているもの(知)は何であれ知られない。例えば、一方の知[眼識]によって他方の知[耳識]が知られないように。[遍充]

同様に、証明されようとしている知(自己認識)は、[知]自体としての顕現を欠いている。[論理的根拠]

[証明されようとしている知(自己認識)は知られない。(結論)]

この立証因は、不成(asiddha)でもない。それ故に、(SDP 19a5-7)>

[知]自体としての顕現(rañ snañ ba)が認められないなら、[二取の形象と知は]区別(tha dad pa, bheda)あるものと(SDV 4b3-4)になってしまう。青とその知の如し。<それはこういうことである。例えば青とそれを顕現している青の知は別である。そういうわけで青自体が青として顕現しないのと同様、知と知の自体(śes pa'i bdag ñid)として顕現したもの(二取の形象)とが区別されることになろう。そうは認められない(二取の形象とその知は別ではない)。別の知(B)によって[二取の形象を有した]知(A)が知覚されると構想する

なら、無限遡及 (anavasthā) となる (Bも別な知により知られなくてはならなくなる) からである。そうであれば、この (知自体としての顕現を欠いているという) 立証因は不成ではないと述べるのである。

[反論]

③ [知は] 認識 (rig pa, saṃvedana) を自性としているから、自ら知るのもあって、自己の形象 (ākāra) を欠いてもいる。この両者 (自ら知ることと自己の形象を欠いていること) にいかなる矛盾があろうか。そうであれば、この (自己の顕現を欠いているという) 立証因が異品から排除されること (知られるなら、必ず [形象の] 顕現を有している) に疑惑がある。

(SDP 19a7-b3) >

[知は] 認識 (rig pa) を自性とするからでもない。 <自ら知るとするのは (SDP19b3) > 過大適用の過失となるからである。 <そうであれば (知が自らを知るなら) 全ての知もすべてを知るものとなろう。どんな知も何らのものをも知らないことはないという自性のもとなろう。 >

[反論]

青の知は、黄色の知の認識を自性とするものではない。

[答論]

[知は] 認識を自性とするからというのは妥当しない。 [なぜなら] 対象 (yul) を [感官知により] 知覚する際、これは青の知であるが、これは黄色の知ではない、という識別 (rnam par dbye ba, vibhāga) が存在しないから [知は認識を自性とするとはいえないの] である⁽¹⁵⁾。

(SDP 19b3-4) >

[反論]

[認識の自性とは] 自己認識 (rañ rig pa, svasaṃvedana) を自性とするものであるが故に [黄色の知から青の知を識別することは] それ故に過大適用の過失とはならない。

[答論]

それも妥当しない、 [自己認識には対象という] 近接した原因が存在しないからである。そうでなければ (近接した因がなくとも、認識を自性とするというのは) 過大適用の過失 (SDV 4b5) となろう。 <それはこういうことである。これ (認識の自性) は自己認識を自性とするものであるが、これ (自己認識) は他を認識する自性をもつものではないというこの場合、いかなる近接した因があろうか。それで、こうこうである (近接した因がなくとも認識を自性とする) と語っているというであろう。そうではなく近接した因がないなら、過大適用の過失となることは以前と同じである。 >

[反論]

原因が存在するなら、その原因もその形象と別 (gshan) ではない。

[答論]

そうであっても、 [知] 自体としての顕現が認められないなら⁽¹⁶⁾、 [青とその知の如く] 区

別 (bheda) あるものとなろうという過失を以前に⁽¹⁷⁾述べ終わっている。(SDP 19b5-7)〈

[反論]

④知の自性とはこういうこと ('di 'dra, iḍṛṣa) であり、自己の因 (rañ gi rgyu, svahetu) から生起し、それ (知の自性) はそういうものとして (de ltar, tathā) あるのである⁽¹⁸⁾。

[答論]

また、妥当しない。[1. 認識を自性とすること及び近接した因がない点で過大適用の過失となると] 答え終わっているから、あるいは [自己認識は自己の因により生起し自らにより自らを知ると証明する] 2. 整合性のあるプラマーナがないからである。

〈[反論] 認識の自性 (rig pa'i no bo ñid) が自己の因から生起する。

[答論] その場合、我々は認識の自性であるからでもなく、過大適用の過失であるからということによって答え終わっている、と [ジュニャーナガルバは] 述べている。

[反論] 自己認識の自性は自己の因から生起する。

[答論] 我々はその場合にも [知は] 自己認識を自性とするから、それ故、過大適用の過失とならないという反論にも妥当しない [と答える]。近接した因がないからである。そうでなければ、過大適用の過失となろう、ということによって答え終わっているし、別のあり方はあり得ない。

[反論] 何故あり得ないのか。以上の理由でこれ (知) は自己を知るが、これ (知) は他を知ることはないというそういった単一な自性が、その知に存在するけれども、それは、考察 (dpyad pa) され得ない。

[答論] もし、以上のように非物質的なもの (dpyad du med pa, arūpin) である故に、これ (知) は自らによって自らを知るが、他を知ることはない、そのように確定するなら、述べられた [主張の] ままに [知の] 自らを知ることが成立する。それ故に、これはつまらぬ論議である。その知 (jñāna) の自性とはこういうこと ('di 'dra) であり、自己の因から生起するという、そのことに関して [立証する] いかなるプラマーナもない。それ故に、整合性のあるプラマーナはないから、と [ジュニャーナガルバは] 答えたのである。(SDP 19b7-20a4)〈

〈プラマーナがなくとも、知はそのように生起することは不合理であると述べるために、
[以下のことを述べる] (SDP 20a4)〉

見解の異なる〈異なる定説に立脚している (SDP 20a4-5)〉他の者達は自己の立場〈学説 (SDP 20a5)〉を主張するだけの者を敬いはしない。〈補足的説明として (SDP 20a5)〉3. 無形象知識 (SDV4b6) 論者 (シュバグプタ)⁽¹⁹⁾によるそういう詰問〈云々というのは、これ (知) は無形象に他ならず、その自体 (tādātmya) とはこういうことであり、自己の因⁽²⁰⁾から生起し、それがそう (SDV4b5) これは青の知であるが、黄色の知ではないと [識別する] ことになる。そうであれば、この (自己認識の) 場合 [知は無形象であるにもかかわらず自己の因から青、黄色の識別が起こるといふ] 立証因によって何が [証明] されるのか (無形象知

の場合と同じになる) ということ (SDP 20a5-6) に対して <汝のうちで論理学の最高の人である (SDP 20a6) 〉ディグナーガとダルマキールティあるいは別の誰かある者 <その論理学の追随者である汝 (シャーキャブッディ)⁽²¹⁾ (SDP 20a7) 〉が対象の形象を有するもの (有形象知) こそが [青の知と黄色の知の識別を] 証明するプラマーナであると、どうしていえようか。

<[自己の因は] 何の働きもしないと述べるに加えその最高の人 (ディグナーガ、ダルマキールティ、その追随者である汝シャーキャブッディ) のそういった一方的な論理を別の [学説に従う] 者達も認めない。それ故に、それ (無二知なる自己認識) は、論理 (rigs pa, yukti) を具えていないと [ジュニャーナガルバは] 言うのである。

また、[シャーキャブッディにより主張される] その (自己認識である知の) 自性は、こういうことであり、自己の因から生起するというそういうことは、不合理である。(SDP 20a7-b1) 〉

<[反論] それは、どうしてであるか。(SDP 20b1) 〉

[3. 二取の無を単なる無知覚として解釈するなら] 原因の効力が否定される (無の確定という結果を設けない) からである。(SDK 6d)

以下で [自己認識に関しては] 原因 (rgyu) の効力が否定されるから、またこれは不合理である (SDV4b6)。<自己認識は不合理であるから、三性も見ないとしても、その <依他起性など (SDP 20b3) 〉三性は有 (yod pa) に他ならない。そういうわけで [見ないとは] 単なる無知覚 (anupalabdhi) であるから、無であると確定し得ないと時に (brgya la) そう [ダルマキールティは]⁽²²⁾述べている故に [二取の無は無も他のものの有も] 確定され得ないと述べ、それ (自己認識) と結びつく。

[反論]

何故であるか。(SDP20b1-2) 〉

[答論]

まさしくそれ故にあらゆる自性を見ないことが真理を見ることであると認めたとしても、何も (ji ga) 確定され得ない (SDV4b6-7)。<見ないことが真理を見ることであると認めたとしてもと言った。

[反論]

何をであるか。

[答論]

あらゆる自性をというのである。依他などの自性は有であるということを補う。

[反論]

何故であるか。

[答論]

まさしくそれ故に、というのである。自己認識は〔二取の無は相対否定のみならず絶対否定としても成立しない故〕不合理であるからである。何も (ji ga) とは〔見ないことと見ることに〕耐え得ないことをいうのである。

[反論]

何故、〔見ないことと見ることが〕確定され得ないのであるか。

[答論]

それ故 (SDP20b2-3) 以下の通りいわれる (SDV4b7)。

何と無を熟知する人すなわち一切智者も、ご覧にならないものがある。〔それが〕 どういったものであるかは、寂靜なる人の見解によって吟味される。 (SDK 7)

I . II. ジュニャーナガルバによる自己認識批判(2) (所取、能取の吟味) — 『二諦分別論』

SDV10b7-11a6, SDP40b2-42b3 ad SDK24

〈瑜伽行派の实在論者である (SDP40b2) 〉 汝の見解においても

① すなわち遍計された (brtags pa, kalpita) 自性をもつもの 〈所取能取の特徴を有するもの (SDP40b2) 〉 は、何 くらゐの原因 (SDP40b2) 〉 にも決して依存することがない。 (SDK24ab)

〈瑜伽行派の主張を懸念して、常に無となるからである。〉

[反論]

〔遍計されたものは〕 無なる故に依存することがない。〈遍計されたもの (brtags pa) は専ら無である。第一句は相無自性を説くのに等しい (Trinś 24ab)。それ故に、これ (遍計されたもの) は顕現する (SDP40b4) がままであっても無である故、それが因に依存しないのは理に適っている。顕現するままに世俗として実在するものは必ず因に依存する。〉

[1. 直接知覚の点からの吟味]

[答論]

〈それ故にこのことに答えて〉 直接知覚と矛盾する 〈ことになると述べたのである。〉

[反論]

この場合、どうやって直接知覚との矛盾を確定し得ようか、直接知覚と常識 (prasiddha) の意義を断じるものである。

[答論]

所取能取は遍計された自性のものであるということであり、内容的に (don phyr na) 遍計であると述べていることになるからである。その二もまさしく直接知覚されるものとして (SDP40b6) 馬車の売り手などのあらゆる人々にとって常識のプラマーナによってよく知られている故に、それを断じるなら直接知覚と矛盾することは避け難い。というのは、〔外界として別個に顕現する〕 青など (客体) とそれを認識するもの (主体) は、あらゆる有情の直接知覚として成立する。また対論者は意図するところを (SDP40b7) 前面に出して知識は無二

を自性とする [と主張する] 所取能取 (SDV11a1) は [対論者によれば] 遍計された (brtags pa) 本質のものである一方、その二もまさしく直接知覚としてよく知られている (prasiddha)。

[反論]

②無明 (avidyā) により <所取能取として執着することで (SDP40b7)> 惑乱した知識こそが、そう (二取を) <所取能取の自性として二に執着する習気という目覚めていない眠気の怠惰によって捕らえられた諸の心によって知るままに (SDP40b7-41a1)> 知るのである⁽²³⁾。

[答論] <道理を語る者 (rigs pa smra ba, nyāyavādin) (ジュニャーナガルバ) が答える。 (SDP41a1)> 知覚経験 (myoñ ba, anubhava) と矛盾することになる⁽²⁴⁾ ことを否定する何かは汝にはあるのであるか。 <[二を知覚経験するのは] 学説の主張を把握することにより苛まれていない智慧を具えた女性やシュードラなどであるのか、あるいは執着のない状態にあるなら、汝も [二を知覚経験するのに] 適している。この転識 (pravṛttivijñāna) は色などとして知られるが、それ (転識) とは別の (外界の) 色や声などは存在しないというそういった知覚経験はないが、この知は内に存在する自性のものである。この色などは外に顕現する自性のものであるという知覚経験のあることは周知されている。もし、汝がそういったあらゆる世間の人々の間でよく知られている [知と別な外界の] 対象も断じるなら、その際 (SDP41a1-3)> 自ら (SDV11a2) 知られないそういったこと (所取能取の顕現しない知) は <自分と他人によって知覚経験されるもの (二取) と対立した言葉を語る汝は (SDP41a4)> 世間の人々により全く疎遠であると断ぜられる。 <世間の人々の言葉と一致しないことになるからである。対論者が次にいう。 (SDP41a4)>

[反論]

夢など <幻や蜃気楼> で <知自身がそう (外界の無を) 知ることを> 経験くしないのか。 <夢で外界の色が存在することは妥当しない。小さな家の中でもヨーヅナの大きさの山や木や海など (知自体によるもの) が知覚されるからである。色なども抵触性を具えている (sapratiḡha)。 そうであれば、その場合、知自身がそう (色などを) 知るのである。眠りに入っていない状態においてもそれ (知自身が色などを知るの) と同じである。 (SDP41a4-6)>

[答論]

<それに対して答える。> 実際に <夢などにおいても知に属さない色などが顕現するままに (SDP41a6-7)> 見られるとしても、悪しき執着 (abhiniveśa) によって汝には <知自身がそう (色などを) 知るのであると (SDP41a7)> 誤って考えるのであるが <眠りに入っていない状態の如くに、その (夢などの) 場合にもそう (色などが) 知られるなら、顕現するがままの外界の色などは存在するに他ならない。>

[反論]

論理的に妥当しない。

[答論]

③まさしくそれ故に「顕現するがままの外界の色などの対象は」吟味しなければ素晴らしい (ma brtags na ñams dga' ba, avicāritaramañīya)⁽²⁵⁾から、また考察による吟味に耐え得ない (brtag pa'i dpyad pa mi bzod pa) から世俗 (sāṃvṛta) であるといわれる。[汝により主張される] 眠りに入って転倒していない状態において存在している (自己認識としての無二) 知もまさしくそういうこと (吟味しない限り素晴らしく、また吟味に耐え得ないから世俗) に他ならない。それ (眠りに入っていない状態において存在する自己認識としての無二知) も [勝義としては] 不生 (anutpanna) であると論証されるからである⁽²⁶⁾。さらに答えよう。(SDP41a7-b2)〉

[④必然関係 (pratibandha) の吟味]

またくあらゆる世間の人々にとって (SDP41b2)〉この所取能取の形象としての顕現は依他起 (gshan gyi dbaṅ, paratantra) であるのか、あるいは (SDV11a3) 〈どうして、これ (二取の形象) が妥当し〉それ〈依他起性 (paratantrasvabhāva) であること (SDP41b2)〉が正しいのなら (yañ dag par na)、[知は] それ (二取の形象) を欠くことを自性 (離性) とするもの (dben pa'i ño bo can) であるのか。〈その所取能取の形象を欠き離性が存在するとそういわれる。そこ (無二知) に前者 (所取能取の形象) は [遍計所執性故に] 常に存在しないといわれるからである。(SDP41b3)〉〈それ故〉どうして〈依他起性が (SDP41b3)〉そう〈所取能取の形象として (SDP41b3)〉顕現しようか。[汝が] 無明により惑乱している (ma rig pas dkrugs pa) から、そう (二として) 顕現すると認めるとしても⁽²⁷⁾ 〈不合理である。(SDP41b4)〉

[同一性 (tādātmya) の吟味]

その〈所取能取の形象は依他起との (SDP41b4-5)〉同一性 (tādātmya) 〈を自性とするもの (SDP41b5)〉ではない。

〈依他起 (SDP41b5)〉それ自体は〈所取能取の (SDP41b5)〉二〈自性 (SDP41b5)〉を欠いているからである。そうであるとしても [所取能取と依他起性には] 必然的關係が存在しない ('brel pa med pa, apratibaddha) から⁽²⁸⁾、その〈依他起の自体 (知) (SDP41b5)〉が顕現しても、二がどうして顕現するであろうか。(SDV11a3-4) 〈何故、それ (二) は顕現しないのかというなら、二と依他起には必然的關係がないからである。(SDP41b6)〉

〈あるもの (B) を欠いているか、あるいはあるもの (B) と必然的關係にないあるもの (A、依他起の自体) が顕現しても、(B、二) は顕現しない。例えば、耳識にとっての色のように。(遍充)

依他起の自体 (知) も二を欠いているなら、二と依他起の自体 (知) に必然的關係もない。
(論理的根拠)

[結論：依他起の自体 (知) に二は顕現はない]

以上の推論は能遍の無知覚 (vyāpakānupalabdhi) [因に基づくもの] である。(SDP41b6-7) >

[因果性 (tadutpatti) の吟味]

[反論]

〈立証因である二者 (二と依他起性の自体には必然関係がない) は不成 (asiddha) である。というのは、無明によって惑乱しているからであるとこのことによって (SDP41b7) > 必然的關係 (’brel pa, pratibandha) はすでに述べ終わっている。

[答論]

そう 〈必然関係が存在するの (SDP42a1) > であれば、〈その時、二を欠いている知の自性 (依他起性) の如く [二は] 無明と必然的に結合するから (SDP42a1) >

[二が] 依他起 (gshan dbaṅ) であるということを誰が退けられようか。(SDK24cd)

〈誰も退け得ない (SDP42a1) >

〈というのは、[知は] 二を欠いており依他起である心、心所を自体とする (自己認識) と [汝により] 認められている (SDP42a2) > 他方 (二) も依他起 (gshan gyi dbaṅ, paratantra) に他ならないことになるなら 〈依他起の自体として確立されているもの (知) に [二は] 必然的に結合する (SDP42a2) > [二は] この因そのものがあって、その 〈必然的關係にある因が (SDP42a2) > この 〈二 (SDP42a2) > にも存在する。そうであれば 〈それ故 (SDP42a3) > [二は依他起となり] 遍計されたものは存在しない。

〈[反論] 二が顕現する知自体は因と縁によって生起するから依他起であるが、二は [依他起] ではない (遍計である)。それ故、以下に答える。(SDP42a3) >

[答論]

もしも、知自体が諸の因と縁 (SDV11a5) によって生起するなら 〈それ (知自体) も真実としては不生である故、多 (ex. 眼、色、光、注意力など) によって一なる事物 (ex. 眼識) は設けられない云々⁽²⁹⁾と証明し終わっている。けれども解説を加えよう。それ (知) のみが (SDP42a4) > 生起する場合、[知は因と縁に] 依存するとしても (rag na)、その 〈二の自体 (SDP42a4) > がどうして顕現しようか。〈[汝の学説によれば] それ (二) は、それら (因と縁) によって生起しない。(SDP42a5) >

[反論]

⑤ 〈依他起を本体とする (SDP42a5) > 知自体が、そう (de ltar) 〈二を自性として (SDP42a5) > 顕現する。

[答論]

それ (何故、二が顕現するかということ) は問い終わっていて 〈二を欠いている自性のものであるその知 (無二知である自己認識) は (SDP42a5) > それら 〈因と縁 (SDP42a5-6) > によって生起するがままに顕現するにすぎない。〈けれども、二の自体としてどうして顕現する

のであるかと問うている (SDP42a6)〉

[反論]

〈二の自性が (SDP42a6)〉 まさしくそう (de lta bu) [自己認識として] 生起 (顕現) する。

[答論]

そうであれば、〈その知 (自己認識) は (SDP42a6)〉 二を欠く自性のものではない。〈それ (知) が二の自体として生起するからである。[二は知の] 自性であって、その二を欠いて存在している自性のも (自己認識) は二を欠いていることを具えている。(SDP42a7)〉 このことに関しては (SDV11a6) 〈二を欠いている自性のも (自己認識) が存在している故にそう (二が顕現すると) 述べている。また、このことに関して依他起であると語ることに拠っている。このことに関して誰が退けようかと (SDP42a7-b1)〉 述べ終わっている。

⑥ <[反論]

知にとって二としてない自性が本来的にあるなら、無明によって惑乱した (ma rig pas dkrugs pa) 別の知によって⁽³⁰⁾それ自体として [二を] 知るのである。(SDP42b1)〉

[答論]

[知は] 無二を自性とするとしても別の知による迷乱 (ses pa gshan gyis 'khrul pa) によってそう (所取能取の二を) 知るのでもない。〈というのは、その別の知に関しても (SDP42b2)〉 批判となるところは同じだからである [別の知も二を欠いているから、何故、二が顕現するかが論じられなくてはならないし、別の知の迷乱によるなら二は依他起となろう]。〈その別の知も二を欠いているに他ならない。そうである (別の知による迷乱によってである) としても、[知と二に] 必然関係がないから、それ (知) が顕現する場合、二がどうして顕現するのか云々ということの全てが論じられなくてはならない。(SDP42b2-3)〉 そういうわけでそれ (別の知による迷乱という論拠) はつまらぬ論議である。

I . III. カマラシーラによるシャーキャブッディの提唱する無二知としての自己認識説批判

Māi 前主張 (P144a6-8, D134a5-7)⁽³¹⁾

また、二 (所取能取) として顕現する知識によってこそ一切法に [二の] 生起などの区別 (bye brag, bheda) を設けるのであるが、自己認識 (rañ rig pa, svasaṃvedana) のみという点ではない。二 (所取能取) としての顕現も虚偽 (alika) であるから、それ (二) によって確定される全ての自性をもつもの (所取と能取なる知) も虚偽なものに他ならないのである。そういうわけで、遍計所執相 (parikalpita lakṣaṇa) は無自性である故、一切法は不生などと [世尊は『般若経』等で] お説きになっているが、勝義として [無二知なる自己認識は不生なの] ではない (≡PVTŚ P252b7-253a1, D205a1-3)⁽³²⁾。それ故に、まず聖教 (luñ) によっては [一切法無自性は証明し] 得ない。

MaI 後主張 (P180b5-183a1, D165b7-168a1)

そのことについても述べなくてはならない。

[シャーキャブッディの対論者の主張]

もし、一切法の生起などの性質が、虚偽を本性とする顕現 (二なる所取能取の形象) を有した知によって確定される本性のものであるならば、それ (自己認識) に、どうしてこの二 [としての顕現] が勝義として存在しようか (もし単一な知に二なる形象が真実であることは矛盾するなら、そうなら二以外の何らかのものが真実ということになろう⁽³³⁾)。二としての顕現も虚偽に他ならないのなら、勝義として存在し得るそれ (二) 以外の何らかの知の本性があるか (もし所取能取の二も実在しないのなら、知識であるものにとって、真実となる何か別のものがあるか⁽³⁴⁾)。所取能取の形象を欠いた別な真実なる知が凡夫達 [の直接知覚] によって確かなものとして知覚されることはない。[確かなものとして知覚されるなら] 全ての人々が真実を見ることになるであろう。[そうであれば、衆生 (luś caṇ, dehin) 達が努力なくして解脱することになろう。⁽³⁵⁾]

それ (所取能取の形象を欠いた別な真実なる知) は推理によって確定されることもない⁽³⁶⁾。そのような能証 (liṅga) 自体が成立しないからである。というのは、まず同一性 (svabhāva) の能証によって設けられる推理はあり得ない。その (所取能取の形象を欠いていることと真実を見ることとの) 同一性こそが証明されなくてはならないからである。結果 (kārya) の能証 [によって設けられる推理] も [あり得] ない。二としてないものと共にはいかなるものも [直接知覚と無知覚によって証明される⁽³⁷⁾] 因果関係にあることは成立しないからである。それ (所取能取の形象を欠いた別な真実なる知) は感官によってあり得ないからである。それ (所取能取の形象を欠いていること) とは別な結果が実在することもない。というのは、汝 (瑜伽行派、rṇal 'byor spyod pa, Yogācāra⁽³⁸⁾) の見解では二としてないものが結果である真実なるものであるなら、そのこと自体が証明されなくてはならないから、それもプラマーナによって証明されていないのである。二として顕現するもの (所取能取の形象) は [汝の見解では] 兎の角と等しいから、結果ではないのである。どうして直接知覚と無知覚によって証明される因果関係⁽³⁹⁾ が成り立とうか。勝義として二としてない知によっても何も把握されないのである。無知覚 (anupalabdhi) も否定 (pratiśedha) を証明するものであるから⁽⁴⁰⁾、実在を証明するものとしてあるのではない。

[シャーキャブッディの答弁]

その場合、それ (所取能取の形象を欠いた覚知の自性) を証明するプラマーナはあるのである。というのは、[(1) 推論によれば]

ある (二) なる自性と対立するそのもの (覚知の自性) は、その (二) なる自性を欠いている。例えば、冷たい性質を退けている暖かさは冷たい性質を欠いている (P181a5) ように。

[遍充]

覚知の自性 (rtogs pa'i ño bo, bodharūpa) (自己認識) も、二なる自性を退けている。[論理的根拠]

[覚知の自性は、二なる自性を欠いている。結論]

[以上の推論は] 能遍と対立するものの認識 (vyāpakaviruddhopalabdhi) によるものである [=PVTŚ P252b4-6]。立証因は所依不成 (āśrayāsiddha) (D166a7) でもない [=PVTŚ P252b1-2]。[(2)自己認識に関しては] 1)一般に喜びや喜びでないなどの [心所の] 形象を知覚するダルミンである知識という知を本性とするもの (自己認識) は成立するからである [=PVTŚ P251b5-6, D204a4]。[自己認識の] 自性は不成 (svarūpāsiddha) でもない。2) [知と別な] 所取の形象 (外界に存在するかのように青などとして顕現しているもの) は一多の自性を欠いている (gcig dañ du ma'i ño do ñid dañ bral ba, ekānekasvabhāvarahita, -viyoga) 故に無自性であるから、(P181a7) それ (所取の形象) に依存して構築された (rab tu brtags pa) 能取の形象も無自性であるからである [=PVTŚ P251b5-8, D204a4-6]。[したがって、知は無二である。]⁽⁴¹⁾ 3) 全てが無存在となってしまうこともない。[所取能取の形象は] 主体 (byed pa po, kāraka) と客体 (las, kriyā) の本質だけに依存することのみから仮説された (ñe bar brtags pa) 本質のものであるから虚偽 (alika) なものに他ならないが、[自己認識なる覚知の] 自体そのもの (D166b2) は [虚偽] ではない [=PVTŚ P251b5-252a2, D204a4-7]⁽⁴²⁾。

[カマラシーラのシャーキャブッディ批判]

[(1)所取能取の形象を離れた覚知の自性を証明する推論に関する吟味]

[A.二取の無を絶対否定として証明しようとするなら]

①それも不合理である。もし、一般的に勝義として二を離れていることのみ (dben pa tsam shig) を証明しようとするのなら、その場合、わかりきたこと (siddhasādhana) をさらに証明することに他ならない。我々 (中観派) も勝義 (P181b1) として二 (所取能取の形象) は虚偽 (alika) であるから欠如している (vivikta) と述べるのである。もし非存在 (ma yin pa, abhāva) を自性とする勝義の点から知識が形象を欠いていることを証明しようとするなら、その場合も、わきりきたことを更に証明することに他ならない。我々 (中観派) も、勝義として一切法は不生であるから、あらゆる知識は勝義として無であって実としての二形象を離れていると主張するからである。

[B.二取の無を相対否定として証明しようとするなら]

②もし、知識 (自己認識) というダルミンにおいて二 (所取能取の形象) を欠いていることと実在を自性とすることの両者共 (P181b3)、証明しようとするなら、その場合、喩例において肯定的遍充 (冷たさを欠いている暖かさは実在である) が成立しない故、立証因 (二を退けていること) は不確定 (ma ñes pa ñid, anaikāntikatā) である。外界の対象の自性である冷たさと暖かきの両者は真実として成立しないからである。単一な知識 (D166b5) にも知と顕現

を自性とする二が顕われるから対立しないことがある故、喩例 (暖かさ) は所証 (冷たさの無) を欠いてもいる (暖かさを知る知に冷たさも顕現する)。

[反論]

③二 (所取能取の形象) を欠いている (無二) 知が成立するなら、必然的に実在を自性とするもの (dños po'i ño bo ñid, vasturūpa) (円成実性) も成立する⁽⁴³⁾。

[答論]

この思想は悪しきものである。[無二と知ることと真実にして実在なる自己認識には] 必然関係 ('brel pa, pratibandha) がないからである。この場合、[相対否定として] 二を欠いているところ (依他起性) に必ず真実なる実在 (円成実性) が存在する⁽⁴⁴⁾ というこの必然的關係は何であるのか。それ (所証) と矛盾したものを拒斥する検証 (反所証拒斥検証、真実なる実在に非ざるものは必ず二を具えたものであること) がないから、またそういった喩例 (P181b6) が成立しないからである。石女の息子などとその二自体という点で不確定 (anai-kāntika) となる (真実にして実在にあらざる石女の息子は所取能取の二形象を具えていない) からでもある。無限遡及 (anavasthā) となるから、二にとって別の (知に) 二が存在するのではない。

④ [所依不成の指摘]

冷たさなどの感触を欠いた暖かさなどなどの自性のように二を自性とすることは別であって、それ (二) を欠いていることが成立し、(D167a1) 覚知の自性 (rtogs pa'i ño bo, bodharūpatā) という一般的な自性を有した別のダルミンが存在するのではない。二 (所取能取の形象) を自体とするものこそが、覚知の自性だからである⁽⁴⁵⁾。というのは、自己自身を照明 (rab tu gsal ba) して別の照明に依存しないことが、覚知の特徴である⁽⁴⁶⁾。多様な形象をもち外界を自性 (phyi rol gyi ño bo) 自体として眼前に顕現する対象である身体、大地、山、河、海などは、まさしく自ら照明 (gsal ba, prakāśa) する故に、覚知を自性とすることから逸脱しないのである。それ (多様な形象を有し外界を自性とするもの) も虚偽を自性とする家系の家 (知) に入り込んで活動する (P182a2) ならば、[多様な形象を有し外界を自性とするものが] 自己の身体と区別なく活動する愛人の如くに、覚知の自性 (bodharūpatā) 自体と抱擁する如く活動する故、[覚知の自性が] 非実在なる (asat) 二と一体となる故、この批判の本体 (汝に主張する無二なる覚知の自性) が信頼に足るものであり得ようか。その自体 (無二なる覚知の自性) の如き二を本質とする (D167a4) 友人と別れたなら、それ故、この (覚知の自性) が他のもの (二) と一体とならずに [特殊性の確定していない] 単なる ('ba' shig, kevala) ダルミンとしてあることはどこにもあり得ない。それ故に立証因は所依不成 (āśrayāsiddha) に他ならない⁽⁴⁷⁾。

⑤ [(2) シャーキャブッディの自己認識論に関する批判]

1') 経量部 (mdo sde pa, Sautrāntika) なども、真実としては、知が二なる自性のものである

とは、全く認めない。無部分なもの (cha śas med pa, 非物質的な知) にそれ (二) は対立 (viruddha) するからである⁽⁴⁸⁾。[外界の対象を認めても無二知は成立することになる] それ故にそれ (自己認識) が無二を自性とするに他ならないと [汝、瑜伽行派が] 証明しても、何が証明されたことになるのか。外界の (P182a5) 対象 (phyi'i don) も、それ (無二であること) と対立しない (aviruddha) からである。もし、別のプラマーナによって外界の事物 (bāhyavastu) は退けられるというなら、それと全く同様に知識に関してもその (別のプラマーナによって退けられる) ことがどうして (D167a6) いわれないのであるか。

2') また、[所取能取の形象は] 主体 (byed pa po, kāraka) と客体 (las, kriyā) の関係にこそ (P182a6) 依存して構築された (rab tu brtags pa) 本質のものであるから、虚偽 (alika) なものに他ならぬ⁽⁴⁹⁾、と [汝が] 述べたこと (無二なる知) も知覚経験 (ñams su myoñ ba, anubhava) と矛盾するに他ならない⁽⁵⁰⁾ [所取能取の形象は直接知覚として明らかに知覚される]。というのは、汝は実際として知識は [所取能取の] 二としてない (青などの) 形象を有するに他ならないと主張するのであるが、青などの心の多様な形象にとって別に区分して顕現する (phyi rol ñid du rnam par chad par snañ ba) もの (所取の形象) も、主体と客体という言葉習慣を区別して知らない諸の凡夫もまた、概念知 (P182a8) の誤謬を離れた心 (直接知覚) において明瞭に正しく知覚するのである。[もし、汝のいう通り] その (D167b1) 多様な存在 (所取能取の形象) が、[主体と客体の関係に] 依存することだけから仮説されたものであるなら、その (所取能取の形象の) 特殊性 (viśeṣa) が凡夫に至るまでの人々に明瞭に顕現することもなかろう。

3') もし、汝が時間的、空間的状況の確定によって区別 (tha dad pa) され、そのように [凡夫に至るまでの人々に] 明瞭に知覚されるその (所取能取の) 形象の集まり (tshogs pa) も虚偽 (遍計されたもの) に他ならないと認めるなら⁽⁵¹⁾、その時、解脱を願っている汝は、二なる本質 (所取能取の形象) を離れ無顕現な (mi mñon pa, tirobhāva) 自体を有した覚知の自性 (bodharūpa) (自己認識) に対しても離性 (viviktasvabhāva) である⁽⁵²⁾と執着しているのであって、他にいかなる貪り (rāga) があろうか。[離性であるとの執着には] 非常に小さな数個の窓の隙間から現れ出ている大きな象の身体の尾 (P182b3) を縛りつけることと同様に諸の賢者は極めて長時間に渡って驚嘆している。したがって、自ら智慧の鋭い剣でその (離性への) 貪りを断じ捨て去るべし。その真実 (satya) なる (依他起なる) 本質を有する知の自体 (覚知の自性) に、いかなる仕方で (gañ gis na) そこ (覚知の自性) に (所取能取の形象が) そのように (時空を限定して) 明瞭に顕現するであろうか。

⑥ [虚偽なる二取と離性なる覚知の自性ととの必然関係 (pratibandha) の吟味]

[主体と客体に依存して遍計された] 虚偽 (alika) を自体 (D167b4) とする諸の (所取能取の) 形象は [離性なる覚知の自性と] 同一性 (tādātmya) 及び因果性 (tadutpatti) を特徴とするいかなる必然関係もない⁽⁵³⁾。(P182b5) 相互に排除し合って存在することを特徴とす

る真実 (satya) [すなわち離性なる覚知の自性] と非真実 (asatya) [すなわち諸の所取能取のの形象] が同一性の関係にあることは矛盾するからであるし、[またそれらには因果性も成立しない。なぜなら] 非真実 (遍計なる諸の所取能取の形象) も何かから生起することは認められないからである。[原因を有すると認められるなら依他起性となる]。(D167b5)

それ (諸の所取能取の形象) が [覚知の自性から] 生起するとしても、これら (諸の所取能取の形象と覚知の自性) が同時に同一性として顕現することはない。原因と結果は時間と自性が区別されるからである (因果は同一ではない)。必然関係がなくとも顕現すると確定することも不合理である。過大適用の過失 (atiprasaṅga) となるからである。したがって (P182b7)、必ず覚知の自性 (bodharūpa) (自己認識) と区別なきこと (abheda) を自性とする非真実 (asatya) を自体とする諸の [所取能取の] 形象 (ākāra) が顕現すると認められるから、[覚知の自性と虚偽なる諸の所取能取の形象には] 同一性を特徴とする必然関係 (tādātmyalakṣaṇsaṃbandha) が認められなくてはならない。それ故に、両者 (離性なる覚知の自性と諸の所取能取の形象) とともに虚偽であることになる。そうでなければ、どうして諸の虚偽な (所取能取の) 形象 (ākāra) と (D167b7) 覚知の自性こそが同一性として知覚されようか。したがって、[所取能取を欠く離性なる覚知の自性が] 真実である⁽⁵⁴⁾ということへのこの執着 (abhiniveśa) の縄を捨て去るべし⁽⁵⁵⁾。

[4]聖教による証明]

世尊によっても、『金剛般若経』において] 如来が完全にお悟りになった法には、真実もなく虚偽もないと、説かれる⁽⁵⁶⁾。

[略号]

- AAA: *Haribhadra, Abhisamayālaṅkāraḥ Prajñāpāramitāvyaḥkā* ed. by U Wogihara, 1973
BhK: *Bhāvanakrama* I, ed. by G. Tucci
MAK, MAV, MAP: Śāntarakṣita, *Madhyamakālaṅkāra-kārikā*, MA-vṛtti, Kamalaśīla, *MA-pañjikā*, ed. by M. Ichigo, 1985
Mā: Kamalaśīla, *Madhyamakāloka*, P No.5287, D No.3887
MAV: Candrakīrti, *Madhyamakāvatāra*, Bibliotheca Buddhica. IX. Meicho-Fukyu-Kai, 1977
PV: Dharmakīrti, *Pramāṇavārttika*
PVP: Devendrabuddhi, *Pramāṇavārttika-pañjikā*, P No.5717, D No.4217
PVTŚ: Śākyabuddhi, *Pramāṇavārttika-ṭīkā* P No.5718, D. No.4220
SDK, SDV, SDP: Jñānagarbha, *Satyadvaya-kārikā*, D. No.3881, -vṛtti, D. No.3882, Śāntarakṣita, *SD-pañjikā*, D. No.3887
SPT: Kamalaśīla, *Āryasaptaśatikāprajñāpāramitāṭīkā*, P. No.5215

[参考文献]

- 岩田孝 (1981): Śākyamati の知識論、フィロソフィア第69号 / (1993): Prajñākaragupta による prasaṅgaviparyaya の解釈、印佛研究 No.42-1
江島恵教 (1980): 『中観思想の展開』
Shoko Watanabe (1985): Glossary of the *Tattvasaṅgrahaḥpañjikā*

- 戸崎宏正 (1979): 『仏教認識論の研究』上巻 / (1985) 『同』下巻
谷貞志 (1998): ダルマキールティ「否定的認識」の問題—「反所証拒斥認識根拠」構築過程の追跡—、印佛研究No.47-1
森山清徹 (1987) カマラシーラの無自性論証とダルマキールティの因果論 / (1990): 後期中観派の二諦説と *pramāṇa*、印佛研究 No.39-1 / (2005a) 後期中観派による四極端の生起の論破とダルマキールティの因果論(下)—*Madhyamakāloka* 和訳研究—、佛教大学『文学部論集』第89号 / (2005b) 同(上)佛教大学仏教学会紀要12号 / (2008a): 後期中観思想(離一多性論)とシャーキャブッディ(上)、佛教大学『文学部論集』第92号 / (2008b): 後期中観思想(離一多性論)と仏教論理学派—デーヴェンドラブッディ、シャーキャブッディの *Pramāṇavārttika* III (kk.200-224) 注の和訳研究—、佛教文化研究第52号
矢板秀臣 (1984): 法称の「非認識」、牧尾良海博士記念論文集 中国の宗教・思想と科学
Yuich Kajiyama (1989): *Trikapañcakacintā*, *Studies in Buddhist Philosophy*

〔注〕

- (1) 相対否定、絶対否定二種の無知覚に関しては cf PVSV k.3 *apavṛtiḥ pramāṇānām apavṛtī-phalā 'sati / anajñānaphalā kācid dhetubhedavyapekṣayā // k.200ab sadasanniścaya-phalā neti syād vā 'pramāṇatā* / 谷 (1998) p.(157)、矢板 (1984) pp. 36-38
- (2) 本稿III.(1)注(8)の部分
- (3) ジュニャーナガルバの SDK8,12 の直接知覚としての顕現、効力の有無を基準とする実世俗、邪世俗の定義からすれば二取は実世俗となろう。森山 (1990), cf MAK64
- (4) cf 森山 (2008b)
- (5) 戸崎 (1985) p. 204fn.328. PV III501cd, 520a
- (6) PV III501cd に反することになる。
- (7) cf 森山 (2008b)
- (8) cf TSP p. 682, 21 ad TS 1999 na hi grāhakabhāvenātmasaṁvedanam abhipretam 以下 PVTŚ に関する和訳研究は森山 (2008b)
- (9) 岩田 (1981) pp. 155-156
- (10) この SDK6, 以下の SDK24 に関する訳注はすでに長沢実導、M.D.Eckel, 松下了宗氏などにより表されている。しかし、それらからはジュニャーナガルバが瑜伽行派のいかなる論師の自己認識論を論難しているかという特定のみならず、そこで展開される自己認識論が無知覚 (*anupalabdhi*) を本質としているとの分析も知られない。それ故、新たに訳出と共に自己認識を巡る論議の本質を明らかにしようとする。
- (11) 『法集経』 P.vol.36 No.904, 74b2-3 *chos tham cad mi mthoñ ba ni yañ dag par mthoñ ba'o // =MAV p.286, 15-16, Māl p183b7-8, D168b4-5, 『修習次第』 BhKp.212, 2-3 katamañ paramārthadarśanam / sarvadharmāṇām adarśanam AAA p.640, 23-25 tad evaṁ kasyacit pāramarthikasya bhāvasya prajñācakṣuṣā 'darśanam eva paramaṁ tattvadarśanam abhipretam 『般若灯論』 PPr D. No.3853 247b3 *mthoñ ba med pa ni de kho na mthoñ ba'o 『稻竿経釈』 P. No. 5502, 183a4 de yañ chos gañ yañ mthoñ ba med pa ni de kho na mthoñ ba'o**
- (12) cf 上述の III(2) (PVTŚ P256a7-8), 森山 (2008b) p. 42, 本稿 I. III. Māl 前主張
- (13) cf PVSV p.2,16-17 *pradeśaviṣeṣe kvacin na ghaṭa upalabdihlakṣaṇaprapṛtasyānupalabdheḥ / [無知覚とは] ある決まった場所に壺が存在しない。認識の条件が獲得されているにもかかわらず認識されないからである。*
すなわち A における B の無は A を見ることにより B の無が知られるという相対否定としての無知覚により無は確定されるが、自己認識は遍計にして無顕現な二を認識しないとしても、相対否定として二の無を確定し得ないから不合理であろう。cf 戸崎 (1979) pp.204-205 fn.9
- (14) チャンドラキールティの以下に示す自己認識批判を皮肉っているものと考えられる。すなわち、

- MAv 72 もし所取がなく能取を離れている。二の空である依他なる実在が存在するなら、これの存在は何によって知られようか。把握されなくとも存在するというはあり得ない。cf MAv p.166,6-14 de ñid kyis de 'dsin par mi 'thad de / rañ gi bdaṅ ñid la byed pa dañ 'gal ba'i phyir ro / ---de ni śes pa gshan gyis 'dsin pa yañ ma yin te / [宗] それ (知) 自体によってそれ (知) が把握されるというのは妥当しない。[因] それ (知) 自体に作用することは矛盾するから。[喩] それは別の知によって把握されるのでもない [ように]。
- (15) cf PVTŚ P257a6 識別は分別知による。cf 岩田デーベンドラ p.13
- (16) SDV4b3 khas mi len na によって読む
- (17) cf SDV4b3-4
- (18) SDV4b5 gal te śes pa'i ño bo ñid ni 'di 'dra ste / rañ gi rgya las skyes śiñ des de ltar 'gyur ro shes na = PVTŚ P252a1-2, D207a7 rtog pa'i ño bo ni phan tshun bltos nas rab tu rtags pa ma yin te / rañ gi rgyu ñid las de de ltar skyes pa ñid kyī phyir ro // cf PVSv p.101,14 p.104,27-28 svanimitta (rañ gi rgyu mtshan)
- (19) cf TSP p.684,12-13 bhadantaśubhguputas tv āha vijñānam anāpannaviṣayākāram api viṣayaṃ pratipadyate tatparicchedarūpatvāt 一方、シュバグプタが答える。知識は対象の形象をもたなくとも、それを識別する自性を有するから対象を認識する。
- (20) この場合、無形象知において青や黄色などの識別を起こす自己の因とは自己認識としてということであろうか。
- (21) cf PVTŚ P250b7 外界の対象が存在するとしても、形象を具えた (有形象) 知が認められなくてはならない。無形象 [知] によっては、[対象を] 把握し得ないからである。このシャーキャブッディの見解をジュニャーナガルバは論難しているものと思える。
- (22) cf PVSv k.3 k.200ab 本稿注(1)
- (23) cf PV III 336-337
- (24) cf Māl P182a6 本稿 I . III. Māl 和訳研究
- (25) cf S. Watanabe (1985) p. 187, 江島 (1980) p. 253(46), AAA p. 976, 19 avicaraikaramaṇīya (ma rtags gcig pur ñams dga' ba)
- (26) MAV p. 290, 11-13 ad MAK91 rañ gi rig pa yañ kun rdzob kyī bden par gtogs pa ñid de gcig dañ du ma'i rañ bzin du brtag mi bzod pa'i phyir, MAV p. 204, 2-3 ad MAK64 brtag mi bzod pas yañ dag pa'i kun rdzob ste / BhKI [219] vicārākṣamatva (brtag mi bzod pa)
- (27) cf PVTŚ P250b8-251a1 ad PV III 212 森山 (2008b) p.27
- (28) cf Māl P182b4 本稿 I . III. Māl 和訳研究
- (29) SDV, SDP ad SDK14 この部分の訳注は森山 (2005a)、(2005b)
- (30) cf PVTŚ P253a7-b2 ad PV III 215 別の知により (迷乱なる) 所取能取の形象が知られる
- (31) 後主張 (P180b4-5, D165b6-7) にも簡略化して再出する。この部分の和訳研究は森山 (1987) pp.42-49に発表したのが、その後、知り得たものを加え再度、訳出したものである。この Māl の部分とシャーキャブッディの PVTŚ との対応を最初に指摘されたのは岩田 (1981) p.160 (36)
- (32) 森山 (2008b) p.33,3-10 以下に示す PVTŚ の和訳は森山 (2008b) pp.28-33
- (33) gal te śes pa gcig la rnam pa gñis de kho na ñid du 'gal ba yin na / 'o na rnam pa de dag las gañ yañ ruñ ba bden par 'gyar ro she na / PVTŚ P251a6
- (34) 'o na gal te gzuñ ba dañ 'dzin pa gñis kyañ yod pa ma yin na śes pa gañ yin pa de'i de kho na ñid du 'gyur ba gzhan ci zhig lus / PVTŚ P251a7
- (35) PVTŚ P251a7-b1
- (36) ジュニャーナガルバの SDV ad SDK6 における自己認識批判と同内容である。
- (37) PVTŚ P251b2
- (38) PVTŚ P251b3, この瑜伽行派とはシャーキャブッディを指す。

- (39) ダルマキールティによれば、因果関係は直接知覚と無知覚により証明される。後代それぞれの回数を巡り見解が分かれた。cf Y. Kajiyama (1989) pp. 475-489
- (40) NB2.19. cf Māi P204b3-4
- (41) この部分に相当するものは (PVTŚ P251b6) gcig dañ du mas dpyad mi bzod pa である。したがってカマラシーラは本文中の後期中観派の定型的表現に変更している。このことからシャーントラクシタ以下の離一多性を根拠とする吟味法自体シャーキャブッディによっていると思われる。シャーキャブッディによるこの吟味法により、さらにはシャーントラクシタによる自己認識論への批判 (MAV ad MAK 46-51) により離一多性を根拠とする一切法の無自性論は形成されている。cf TSP ad TS1997 外界の対象を離一多性を根拠に論破し、所取に依存して構想された知の能取も存在しないから唯識性 (vijñaptimātrata) は成立する。これはシャーキャブッディの論述を活用するものであろう。
- (42) シャーキャブッディによる1) 2) 3)はそれぞれ MAK 16,17,18 (順に TS 1999,2000,2001に対応) におけるシャーントラクシタによる自己認識論に継承されていると考えられる。以下の1') 2') 3')はカマラシーラによる論難としての答論である。
- (43) cf PVTŚ P256a8-b1, gñis kyis dben pa'i bdag ñid ñams su myoñ ba de kho na ñid mthoñ ba yin no // de bas na gñis kyis dben pa'i śes pa ñid skyes pa'i dus na de kho na ñid mthoñ bar 'gyur ro //
- (44) cf PVTŚ P256a7-b1 森山 (2008b) p.42 SDV4b1-2 本稿 I . I . SDK6
- (45) cf PVTŚ P252a1-2, 本稿注(8)
- (46) cf MAV ad MAK18, p72,15-16 de lta bas na gsal bar byed pa gshan la mi bltos par rañ gsal ba'i bdag ñid ni rnam par śes pa'i rañ rig pa shes bya'o //cf PVIII (329)
- (47) cf PVTŚ P252a6-b2 覚知の自性も一般的に単なるダルミンとして成立しないのではない。……立証因は所依不成ではない。森山 (2008b) p.32
- (48) 原子からなる外界实在論を唱える経量部説にとって、原子の無部分性の如く知も部分をもたないから、勝義として単一な知は所取能取の形象の二分化をもたず、有外境であっても無二知は成立する。したがってシャーキャブッディの唯識説としての無二知論は無意味であるとカマラシーラは論難している。cf PVP P226a8-b2 単一な知は部分あるものとして存在しない。cf 森山 (2008b) p.28
- (49) =PVTŚ P251b5-8, D204a4-6, cf TS2000, MAK17
BhKI p.211,3-7 tatra yac cittamātram tad api asati grāhye grāhako na yukto grāhakasya grāhyāpekṣatvāt / tato cittam grāhyagrāhakaviviktam advayam eva cittam iti vicārayet
- (50) cf SDV11a1 ad SDK24 本稿 I . II . SDK24 和訳研究
- (51) cf PVTŚ P253a1 森山 (2008b) p.33
- (52) cf PVIII213cd, PVTŚ P256a7-8, 森山 (2008b) p.42
- (53) cf SDP41b5 ad SDK24 本稿 I . II . SDK24 和訳研究
- (54) cf PVTŚ P256a7-8 森山 (2008b) p.42
- (55) cf BhKI ed. by G.Tucci p.221,13,16., grāhyagrāhakayoś cālikatve tadavyatirekāt tasyāpi satyatvam ayuktam iti vicārayet tatrāpy advayajñāne vastutvābhiniveśam tyajet, advaya-jñānanirābhāsa eva jñāne tiṣṭhed ity arthaḥ
- (56) *Vajracchedikā Prajñāpāramitā*, SORxiii, ed. by E.Conze, p.48,12-14., yaś ca Subhūte Tathāgatena dharmo 'bhisambuddho deśito vā, tatra na satyañ na mṛṣā.

(もりやま せいとつ 人文学科)

2008年10月10日受理